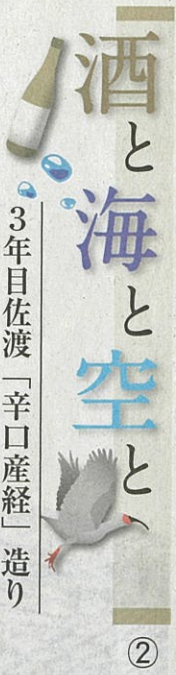


産経日曜版



産経新聞社が地域振興を応援するため、尾畑酒造(新潟県佐渡市)の協力で3年目となるオリジナル酒「辛口産経」を製造する。同社が廃校の小学校校舎を酒造場として再生させた「学校蔵」でまちおこしの専門家を迎えたワークショップ「学校蔵の特別授業」が今年も開催された。(慶田久幸、写真も)

端にいると見える

6月9日、島西部、真野湾に面した小高い丘に立つ学校蔵。特別授業は5代目蔵元で専務の尾畑留美子さん(52)らが中心になって、平成26年から年に1度開催している。授業料は無料。今年は島内、新潟県内、東京などから約120人が参加し、教室に入りきれず廊下からのぞく人も。講師は日本総合研究所の主席研究員、藻谷浩介さん(54)、東大社会科学研究所教授の玄田有史さん(53)、立命館アジア太平洋大学の出口治明さん(70)の3人だ。藻谷さんのテーマは「地方通いのススメ」。

「あるもの探し」を

それを実践したのが、佐渡高校の2年生7人。佐渡ならではの働き方」として、①自然や風土、歴史を生かす②趣味と仕事を両立する③医療・介護を研究発表した。①の例として、魚を材料にした健康食品の製造、農業ロボットの研究と導入、若者向け飲食店や宿泊施設の開設、特色ある食の開発などを提案した。これに対し藻谷さんが「答えは外にあると思っただら間違

改めて知る「多様性の島」



④満員の教室で参加者は講義に耳を傾けた
=6月9日、新潟県佐渡市
⑤講師の出口治明さん、藻谷浩介さん、玄田有史さん(右から)

学校蔵で地域振興の授業

い。島外の人を呼び込める佐渡の「あるもの探し」をしてください」と切り返すなど参加者が熱心に議論した。発表者の一人、金沢悦皇那さん(16)は「歩いて調べて、新しい発見があった。(厳しい意見もあったが)佐渡のことを外から学べてよかった」と述べた。

4時間を超す授業で、多様性、異質なものを受け入れる大切さを改めて思った。佐渡は、北前船が寄港し、日蓮、世阿弥らが流された島である。多様性を受け入れる土壌があるのだ。高校生のよく考

えた発表と、大人から批判的な意見を言われても「勉強になった」と言える姿も素晴らしいなあと感じた。そういえば、何度も佐渡に来ていたのに、よく知らないことに気づいた。

翌日は江戸時代の港町「宿根木」地区を訪れた。小さな入り江は両岸が腕のように伸び、北前船が風雨を避けるには絶好の場所だが、逆に狭い入り江で船が停泊できたのかと驚いた。当時のままの細い道に面した街並みも趣があった。相川の金山を見学した。東京23区の1.5倍あるのだ。

野亀のトビシマカンゾウを見ようとしたが、とても帰りの船に間に合わないことが分かった。島の半分も回らないのに...と思ったが、それだけ佐渡が広いことを実感させられた。東京23区の1.5倍あるのだ。

